阿岐のまほろば Vol. 25

平賀氏関連遺跡

御土居遺跡（高屋町白市）

写真１　御土居遺跡と白山城跡

御土居遺跡は高屋町白市に所在し、古くから中世の国人領主平賀氏の居館跡ではないかと伝えられてきた遺跡です。本遺跡は標高約246m、周辺の住宅地からの比高５～10mほどの低丘陵先端に位置しています。遺跡の東には平賀氏の居城であった白山城を望み、北東には白市の町並みが広がっています。

平賀氏は室町時代から安土桃山時代にかけて高屋地域を中心に支配した国人領主でした。当初は高屋町高屋堀の御薗宇城を拠点としていたようですが、1503（文亀３）年、平賀弘保が御薗宇城の東南３kmの位置に白山城を築いた後は、本拠地を白市に移し、以後平賀氏の当主は、関ケ原の戦いに敗れた毛利氏と共に長州の萩に移るまで、この地に在住していた可能性があります。

このたび道路建設工事に伴って2001年11月～2002年２月にわたり調査を行いました。調査は北側の傾斜地である確認調査区と、「御土居」と伝えられてきた南側平坦地の本調査区に分けて行いました。平坦地は丘陵高所側を削り出して造成しており、東西約100m、南北約50mでやや不整形です。北側は上方に切り立つ崖で、西側は緩やかに

図1　御土居遺跡位置図（1：50,000）

上がる斜面に土塁状の高まりがあります。東側と南側は崖状になって落ち込んでいます。本調査区は平坦地の北東側部分で、中世の溝、ピット（柱穴など）、水溜状遺構、柵列などを検出しました。

溝は幅10cm弱の小さなものと、幅2m弱の大溝があり、東西方向に走るものが多いという特徴があります。大溝の幾つかは、石組であったと考えられます。これらの溝は居住地に関連したものと思われ、大溝は居住地を取り囲んでいた溝、小さい溝は居住地内の建物を区画した溝や排水施設であった可能性があります。

水溜状遺構は南北約1.8m、東西約1mの長方形で、石を2段積み上げた状況で検出しました。南東端を開放して、東西方向の大溝から水が流れ込む仕組みになっており、洗い場や畑に散水するために用いたと思われます。柵列は南北方向の大溝東側に沿うもので、検出できた長さは約15mです。柵には、居住地を取り囲む溝に伴うものと居住地内の特定の場所を区画するものなどがあると考えられますが、この柵列は大溝に伴っていることから前者の可能性があります。この場合、大溝の西側を主な居住地の内側と考えるならば、柵は溝の外側にあったことになります。調査区が限られているため、建物跡などの構成ははっきりしませんが、遺構の多くが調査区の西側に存在することから本遺跡の中心は平坦地の西側部分ではないかと推測されます。

出土遺物は土師質土器、輸入陶磁器（中国青花、青磁、白磁など）、国産陶磁器（備前焼など）などで、時期は16世紀後半が中心といえます。

さて、今回の調査における大溝などの遺構の検出状況、遺跡の立地、出土遺物などからすると、御土居遺跡が平賀氏関連の遺跡であることは確かであろうと思われます。また16世紀後半の遺物が多いことから、平賀氏はこの時期には当地に安定的に居住していた可能性があります。

では、この時期の平賀氏を取り巻く状況はどのようなものだったのでしょうか。まず16世紀後半以前の状況をみると、1503(文亀3)年に白山城築城、1523(大永3)年に頭崎城築城、1535(天文4)年～1540(天文9)年に平賀弘保と長男興貞の争いなどの記録があります。つまり平賀氏は16世紀前半から中頃、山口を本拠としていた大内氏と山陰の尼子氏の争いに巻き込まれたり、同族内で内紛があり、不安定な状況にありました。

一方16世紀後半には、大内・尼子両氏勢力の影響下にあって台頭してきた毛利氏との関係や周辺の有力国人衆との結びつきによって、高屋地域の政情が安定してきたと思われます。16世紀後半の遺物が多く出土したことは安定しつつあった当時期の平賀氏の状況を示しているのかもしれません。次年度以後も調査を行う予定であり、その進展に伴ってさらに詳細が明らかになると思われます。

（伊藤）

写真2　水溜状遺構

図2　現在の地図と幕末の『四日市町並絵図』（竹内家文書、広島県立文書館蔵）をもとに作成

酒都西条と四日市遺跡

四日市遺跡　平成13年度調査（西条本町地区）

平成13年5月から平成14年3月にかけて西条駅前土地区画整理事業に伴う四日市遺跡の発掘調査が行われました。

今では聞かない『四日市』という地名ですが、1890(明治22)年まで使われていた「四日市次郎丸村」に由来しています。中世末期に書かれた古文書に「さいちやう　よつかいち」とあることから、その起源は中世に遡るのでしょう。その頃の四日市の姿は分かっていませんが、江戸時代になると西国街道が整備され、それに伴い町割りが行われたことが、これまでの発掘調査で分かっています。四日市の西国街道は、現在も西条本通と呼ばれ市民の生活道路として利用されています。江戸時代の町屋は、間口の大きさによって税金がかけられていましたので、間口が狭く奥行きの長い短冊形の土地割が形成されました。その形から『うなぎの寝床』と呼ばれ、現在の西条本通りでもその名残を見ることができます。

江戸時代、大名は参勤交代のために徒歩で江戸まで旅をしなくてはいけませんでした。お供の家来や、荷物を持つ人、また、先に行って宿の手配をする人等、大名行列には沢山の人が付いて行きましたので、その宿泊施設も多くの人数を収容する必要がありました。そこで街道ごとに宿場が整備され、全国各地で発展していきます。中でも大名が泊まった宿が本陣で、四日市の本陣は広島藩の直営で御茶屋と呼ばれていました。図2を見ると、宿場町の中心施設である本陣、脇本陣、桝形などが今回の調査区付近に集中していることがわかります。桝形には藩からの通達文を掲げる制札場がありました。四日市の中でも人の往来が最も多い、中心的場所だったのでしょう。

さて、現在の西条は酒の町として全国的に有名ですが、西条で酒造りが本格的に行なわれ始めたのはいつからなのでしょうか？

実は江戸時代初期には西条四日市で三軒の酒造

写真3　男柱発掘作業

さし絵
『日本山海名産図会』
を参考として作成／
桑原茂一作画

家があったことが古文書記録から明らかになっており、酒造りの歴史は、宿場町四日市と起源を同じくすると考えられています。それが考古学的に裏づけできれば、西条における酒造業の発展を解明する重要な手がかりとなりますので、四日市の調査にその発見が期待されていました。

そして、今回の調査区から、酒造に関係すると思われる遺構（写真３）が発見されました。この遺構は２m×2.5m×深さ1.5mと規模が大きく、数人の大人がすっぽり入ってしまうほどでした。遺構の中には直径50cm程の松材が２本等間隔で据えられており、その周りを石や角材でしっかりと固定してありました。これは強い力がかかることを前提として作られたものなのでしょう。これらのことから、男柱と呼ばれる圧搾用装置が想定されました。男柱は、酒の元である醪を絞り、酒粕と清酒に分離する際に使われ、さし絵のような形をしていました。江戸時代に書かれた『日本山海名産図会』では、伊丹の酒造りを詳細に紹介していますが、その中では以下のように使われています。

① 酒の元である醪を布袋にいれる。

② 巨大な槽と呼ばれる木の箱に醪を入れた布袋を詰める。

③ 男柱に重石を吊るす。

④ 重石の数を徐々に増やしていきゆっくりと絞る。

⑤ 清酒を樽に詰める。

この他にも、酒造りには沢山の工程があります。この遺構から分かるのはその一部分ですが、多くの人が携わる、活気あふれる酒造りが想像できるのではないでしょうか？　四日市で造られたお酒が、どこで、どのように売られて、誰が飲んでいたのでしょうか？　皆さんも、いろいろ想像してみて下さい。　（前山）

㈶東広島市教育文化振興事業団　文化財センター報
阿岐のまほろば Vol. 25
発行日　2002(平成14)年３月28日
編集・発行　財団法人東広島市教育文化振興事業団　文化財センター
東広島市西条町大字馬木541-1
TEL 0824-25-3880　〒739-0033
印刷　電子印刷株式会社
広島市中区堺町１-１-５